疾風迅雷の傭兵

輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

疾風迅雷の傭兵

【Ｎコード】

Ｎ６３３４Ｙ

【作者名】

輝

【あらすじ】

不良少年の翔が死んでしまった親父との約束を守るために転生され魔法や武器があたりまえの世界を守るために戦うお話

そこで出会った仲間などとの友情や愛情などを作者の雰囲気だけで勝手に書く小説ですｗｗｗ

初めてなのでいろいろと至らない点があると思いますがよろしくお願いします♪

プロローグ（前書き）

初めての投稿ですw
ぶっちゃけいろいろおかしな点があるんですがそこはご愛嬌という
ことでお願いしますwww

プロローグ

今日で学校を休んで二週間がたとうとしてた
夕日の日差しをうけて目が覚める、あれがすべて夢だったらと思う日々
ちょうど一ヶ月前のことだ・・・
俺は友達の家に泊まっていた時に何者かが入り馬鹿だが元気な親父を奪った
母さんは俺を産んだときに死んだ、そして唯一の家族の親父ももうこの世にはいない・・・
俺はとうとう一人になった・・・

だがこのまま家に引きこもってるわけにもいかない・・・
そう思いながらタバコに火をつける
煙とともに悲惨な姿になった家族の描写をはき捨てる

タバコがないことに気づき最寄のコンビニまで行くことにした
コンビニ帰りにふと噂を思い出す
この町には不思議な噂があって夕方にある坂を上っていたら失った物や人に出会えるという噂である
冗談だと解っていても不思議と足がその坂まで進んでしまう
坂には不思議なことに靄がかかっていた
するとその靄の中に人影が現れる
親父!?そうあれは親父だ!後ろ姿でもすぐにわかる!
俺は全力で坂を上る
近づくとやはりわかるあれは確実に親父だ!噂は本当だったんだ!
親父が俺に気づいたのか振り向く、親父はなにかを言ってるようだが頭痛がひどい
「翔・・・すま××・・おま××に×わる×が・・・」なにを言っ

てるかわからない
「あの世界を救えるのはお前だけなんだ・・・頼む」
そう言って親父はまた靄とともに消えて行こうとする
俺は頭痛がひどくて動けない、直接脳に焼き鏝をされてるようだった
「なんだよ親父！意味わかんねえよ！だけど・・・親父のこと絶対
忘れねえからな！親父は最高の馬鹿で最高の親父だったよ！だから・
・・親父が守りたかったもんも俺が守ってやんよ！」
そうだ・・・俺はこれが言いたかったんだ
親父に今までのお礼が言いたかったんだ・・・
「親父・・・ありがとう。」
「不良の馬鹿息子も言うようになったな・・・」
そう言うと親父は嬉しそうに笑って消えた・・・
俺も頭痛が酷くて気を失った

プロローグ（後書き）

とりあえず主人公がなんで戦うのかを決めたくてやっつけで作った設定ですｗｗｗ

こんな感じですが少しでも楽しいと思ってくれたら次も見てやってくだせえｗ

作者が裸で公園を駆け回りますｗｗｗ

Environmental changes（前書き）

この話は別世界に飛ばされた主人公が親父の言葉を考え行動する話ですw
実はその場の雰囲気で書いてるので多々矛盾が生じると思いますがよろしくです^^;

Environmental changes

親父・・・
親父は最後になにかを守ってくれと言っていた
それは俺にしかできないとも・・・
なら今までなにも返せなかった恩返しとして俺がやれることすべてをやろう・・・

目を覚ます

そこは赤や青、黄で染められたやたらカラフルな空間だった
その部屋の真中のソファーに人間？らしきものが座っていた

「やぁ～いらっしゃい、君を待っていたよ」クッククク

気持ち悪い引き笑いをする人間らしきもの

どうして人間らしきものと思ってしまうのかは簡単だ。
翼が生えていて、鼻が人の二倍は尖がっている。極めつけは角がある。
悪いが俺はあんな人間見たことがない・・・

鼻なんか尖がりすぎていてどこかの某ギャンブル漫画の主人公を思い出してしまう・・・

相手は俺の言葉を待ってるらしい・・・
生憎俺は宇宙人との接し方をしらないのだが・・・

どうしよう・・・

1、カ●ジかよ！
2、お前はなんだ・・・？
3、引き笑いがキモイ、死ね
4、ギャァアアアアアアアア！！！

ぶっちゃけ本音は1か4を言いたいところだが堪える
3は俺が殺されそうなので却下

消去法で2だな・・・。

「お前は・・・誰だ・・・？」

「おやおや私としたことが自己紹介がまだでしたね」クッククク
「わたくしめはガーゴイルと申します。気安くガーちゃんと呼んでくださいね♪」ニコッ

「・・・・・・」
俺の目を見た瞬間ガーゴイルが顔を真っ赤にした・・・。
どうやら照れているらしい・・・
きっm・・・

「ウワァアアアアアアア！」
突然ガーゴイルが恥ずかしくなったのか叫び始めた・・・叫びたいのはこっちだよ・・・
しかも途中にあの女め・・・あの女め・・・とか言ってる・・・。
5分ぐらいたってやっと落ち着いたガーゴイルが話始めた

「あなたがこっちに来たということは雅臣はもうこの世にはいないんですね・・・」
雅臣は俺の親父の名前だ、どうやらこいつは親父の知り合いらしい。
親父よ・・・お前が友達多いのは知ってたが、人外もいたのかよとか思っていると

「では私はあなたにすべてを話さないといけませんね。」
ガーゴイルが突然本題に入ろうとしている
「まずはわたくしめがなぜここにいるかと云うとあなたの暮らしていた世界とこれからあなたが行く世界の門番をしております。」

これから行く世界？
どうゆうことだ？

「雅臣はあなたの暮らしていた住人ではないのです。あなたがこれから行ってもらう世界が本当の雅臣の生まれ育った世界なのです。」

「そこではわたくしめのようなモンスター、怪物、などがいて人間は自分を守るために魔法や兵器などをつくりあげました。その結果・・・力をつけてしまった人間は愚かなことに人間同士で潰し合いを始めたのです。」

なるほど・・・親父が守ってほしいと言った世界はこのことだったのか？
しかも簡単に信じられない話のはずなのにわかってしまう。これは俺が親父の息子だからなのか？
次から次へと疑問が浮かんでくる・・・。

「雅臣は人間同士で潰し合いすることにものすごい嫌悪していました。」

「だから雅臣はあなたにこの世界を救って欲しいと思ったのでしょう・・・。」

「意味がわからん。」
「さっぱり意味がわからない。」
「そもそも俺が世界を平和にすることなどできるわけがない」
「俺ができるのはせいぜい路地裏で不良2，3人と喧嘩して絡まれてる子を助けてあげることぐらいだ」

「いいえ、あなたにはできるのです。あなたにはそれだけの力がある。」
「雅臣はあなたが産まれたときに気づいてしまったのです、あなたの持つ可能性、魔力、能力、身体能力すべてが最強クラスでしょう。」
「だから雅臣はあなたに頼んだのです・・・。」
「どうか・・・世界を救ってください。」

「例えばだ、俺が本当に最強だとしよう。」
「だとしても世界を救うだなんてＲＰＧみたいなこと現実にできるわけないだろ。」

「大丈夫です。」
「少々時間がかかりますが・・・。」
「まずは世界で最強のギルドをつくりなさい。」
「そしてすべての王族を一つにまとめていただき、魔王サタンを倒していただきます。」
「さすれば世界に平和が訪れるでしょう」
「あなたには進む道しか残されておりません。」
「あなたがなにもしなければいづれはあなたの暮らしていた世界も亡くなるでしょう。」

「二つの世界は繋がっているのです。」

俺が世界を・・・救うだって？w

だが俺はすでに親父と約束してしまったから答えは決まっている。

「いいぜ、面白そうだ。俺が世界を救ってやんよ！」

「ありがとうございます。雅臣もきっと天国で喜んでいるでしょう・・・。」

「では・・・どうぞ。」

ガーゴイルが指を鳴らすと突然目の前に扉が現れた

「ではいくつか注意点を、1、あなたの記憶はそのまま記憶されています。2、あなたの母は死んだことになってますがあっちの世界で生きております。お会いになられてみるのも宜しいかと。3、30年の期限がございます。それはすぎるとあなたはすべてを失うでしょう。」

「では・・・新しい人生をごゆるりとどうぞ。」クッククク

それを聞きながら俺は扉の中に入る

すると突然強烈な目眩と閃光が走る

世界を平和にする・・・。

俺にしかできないことならば精一杯してやろう・・・

「なっ・・・なんじゃごりゃぁあああああああああああ！！！」

NEXT

Ｅｎｖｉｒｏｎｍｅｎｔａｌ　ｃｈａｎｇｅｓ　（後書き）

どうもガーゴイルです。クッククク
こんなｋｓみたいな小説誰も読んでないと思いますがね・・・。クッククク
所詮作者の自己満足だから仕方ありませんがまたお会いできることを願っていますよ。

A new family（前書き）

いやぁ～ぶっちゃけなんにも考えてませんwww
こんなんで最後までいけるのかしらw

A new family

単刀直入に言おう。
扉の行き先は簡単だった。
女性のお股だった・・・。

かくしてアドルフ国の12騎士、疾風のＡａｒｏｎ（エアロン）と貴族の聖母のＡｌｍａ（アルマ）の記念すべき第二子が産まれた。
その記念すべき子供Ａｒｔｈｕｒ（アーサー）の第一声は・・・

「なんじゃごりゃぁあああああああああ！！！」

えっ！？ちょっと待って！？俺はいま18歳よ！？ねぇ！？
18歳の子を産んだアルマの反応と言うと・・・

「まぁ！見て！すっごいこの子元気よ！あなた／／／」

「あぁ！そうだな！というかいましゃべったぞ！この子！さぁ！パパと呼ぶんだ！」

「うっわぁ！俺いま赤ちゃんなってるしｗｗｗ」
「うっせいわ！糞ジジィ！」
「ただいま私は大混乱中なんだよぉぉおおお！！！」

「まぁ～この子もうしゃべれるのね！さすが私とエアロンの子供だわ♪」

「そうだな！アルマ♪きっとこの子は偉大な子になるぞ！」

そうしてネジがいくつか抜けてるのでは？と思う夫婦Ａｒｃｈｅｒ（アーチャー）家の次男として翔は産まれたのだった。

どうやらアーチャー家は俺を含め４人家族らしい、エアロンは王を直々に守る１２騎士の副隊長で風の魔法で主に戦う騎士らしい。アルマは国一番の治療魔術の使い手で国の重役らしい。

うん、めっちゃ優秀だね！だけどさ！こんなやつらで本当に国守れんの？と思うのだが。。。

もう一人紹介し忘れていたが俺の二つ上、の姉さんＡｌｉｃｉａ（アリシア）がいる。

もちろん俺の二つ上の姉さんなのでまだ2歳である♪

俺はたびたび姉さんが欲しいと思っていたがまさか2歳の姉さんができるのは予想外だった。。。

画して新しい家族、アーチャー家でくらすことになった翔・・・いや、アーサーであった。

天の声：次からはこれから１０年後の風景に移ります♪

ＮＥＸＴ

※ここで世界観紹介

アドルフ国：アドルフ国はこの世界で国といえる規模では一番小さい国、基本的にこの世界ではめずらしい争いをこのまない国、なので小さくても平和を求め移住するものが多い。

１２騎士：この国が小さいながらも国を保てる理由、アドルフ国の強いものが集まりアドルフ国に伝わる魔武器を一人一つづつ分け与えられている。変わり者が多い

アーサー：本編の主人公、髪が赤色でツンツン

アリシア：アーサーの姉、アルマに似ている。

エアロス：風魔法を主に戦う。二つ名は疾風、魔武器は日本刀。髪は赤色で柔和な顔をしている。

アルマ：アドルフ国一番の治療魔術のプロフェッショナル。世界でも１０本指に入るレベル
髪は黒色で大和撫子！って感じの人。

A new family（後書き）

とりあえずここで家族を紹介したかったんです・・・。w

Encounter and a decision（前書き）

なんか４話まで勢いで書いちゃったけどこれ見てる人っているのかな？ｗｗｗ

Encounter and a decision

アーチャー家に産まれてから１０年の歳月がたった。

俺は今日でちょうど１０歳だ

もちろん今の親父、エアロンには感謝もしてるし良い人だと思う

だからこそ俺の本当の親父の雅臣との約束を守りたいと思う・・・。

あっちの世界ではただの少しばかり喧嘩の強い不良だった俺だがこの世界ではいろいろと違う。

身体能力の基準がこっちの世界では違うらしい

いまの俺は本気でジャンプすれば１０ｍは飛べるし岩を蹴りで壊せる。

と、言っても俺はこの世界ではやたら可笑しい身体能力らしいが・・・。

魔法も親父から風魔法を教わっている

魔法は・・・ハッキリ言ってぜんぜん駄目である。

風魔法のコントロールができないのだ

親父曰く魔力はないことはないんだけどね・・・。なんでできないんだろ？

らしい。

エアリスはこの１０年でそうとう変わった

主に胸が・・・。

１２歳とはとてもじゃないが思えない美貌である

今では家に追っかけがプレゼントを渡しにくるレベルである。

エアリスは案の定治療魔術の才能があり、それを認められトップレベルの学校にすでに特別待遇で入学することが決まっている

俺も一応誘われたのだが断った
この世界でも学校とか冗談ではない

などここ１０年で変わったことを自分の部屋で考えていた。
なんか俺・・・年とったな・・・
まぁー現に普通なら今は２８歳なのだが。
などと考えていたら突然ノックがされた

「アーサー！パパだけど、いるか？」

「いるよ、親父・・・」

「だからパパと呼んでくれとなんど頼めば・・・」

「それだけはマジ簡便してくれ・・・。」

親父はなんとしてでも俺にパパと呼ばせたいらしい
良い迷惑だ・・・。

「ちょっと遠出になるのだが出かけないか？」

「どこに？」

「Ａｂｅｌ（アベル）君の家にちょっとお仕事で行くのだがどうだい？」

アベルとは12騎士の槍と水を司るＡｄｏｌｆ（アドルフ）の息子である
アベルとはちょくちょくあったことがあるが気さくで俺の友達だ

「いいよ、行くから準備する」

「わかった！なら下のバイクで待ってるから着てくれ」

この世界では俺の前いた世界のものが普通にある
バイクもあれば銃、タバコまである。
ちょくちょく親父のタバコを盗んで吸っているのはここだけの秘密だ

「おっと、そのまえにお前に渡しときたいものがあったんだ」

「なに？」

「誕生日おめでとう。」

親父から渡されたのは一本の日本刀だった

「お前は剣の才能があったからな、お前にこれを渡したかったんだ」

「ありがとう！」

ちょっと嬉しかったのは内緒だ。

「と、言ってもこのまえ迷宮を攻略したときに精霊から貰った物だから能力はわからないのだがな・・・。」

「能力？」

「そうだ、これは魔武器らしいのだが能力が誰もわからなくてな。」
「そんなもんもらってもよかったの！？」
「大丈夫さ！優秀な若者には優秀な物を！ってな」
「んじゃーパパは下で待ってるからな！」
「うぃーっす！」

バイクで約2時間ほど俺はサイドカーに乗っていたのだが、暇だなど思えなかった。
親父の出すスピードが尋常ではなかったのである・・・。
なんど死ぬと思ったことか・・・。
とりあえずついたのでいいが、生の大切さを学ぶのにいい経験になった。
「よっ！アーサー！久しぶりだな」
声が聞こえたほうに振り向く前に猛烈なタックルがきた・・・。
「グハッ！」
「やぁ♪アベル君ひさしぶりだね！」
「エアロスのおっちゃんも元気でなによりだぜ☆」
「おっちゃんじゃないぞ、お兄さんと呼びなさい・・・。」

「お兄さんって年じゃねえだろバカ親父」

「アルマぁあああああ！！！アーサーがぐれちゃったよぉぉぉおおおおおおお」

「エアロスのおっちゃん相変わらず面白いな」といいながら腹をかかえて笑っている

「とりあえずパパはお仕事行くから遊んできなさい」

「はーい！」
「うぃーっす！」

ということで二人で町はずれの森で探検することにした
すると森のほうで人影をみつけた
普通こんなところを歩いているのは森の魔物かバカな子供ぐらいである

「おぉーい！なにやってるのぉー？」バカ一号アベルが進む

「・・・・・・・・・・」

Encounter and a decision（後書き）

次は能力とバトルシーンだぜ！楽しみにといてね♪

The first battle（前書き）

どうも、この小説を少しでも見てくれた方がたがいてくれたことに猛烈に感謝している作者です。

今回はいろいろと詰め込みすぎちゃった♪テヘペロッ

The first battle

バカ一号ことアベルがその人影に走って行ったので俺も後ろについていく。

「ほう、この国の子供か・・・どうした？」

そいつは髪は白で長髪の不思議な男だった、しかもあふれんばかりの魔力を感じれる。

子供でもすぐにわかってしまうような魔力だ。

おそらく二つ名のあるレベルでもそうとう最強の部類だろう。

「お兄さん、そうとう強い武芸者と見たね！名前はなんて言うの？」

「ふん・・・名前などとうの昔に忘れた。お前らこそ名をなんと言う」

「俺は名高い１２騎士の一人アドルフの息子！アベル様だぜ！」

「あっちの目つきが悪いのがアーサーだ、あいつも１２騎士の息子だぜ！」

「将来はあんたなんか目じゃないぐらい強い武芸者になる予定だ！」

「ほう、それは面白い」

「お前ら・・・夢はあるのか？」

「俺は最強の槍使いになることだ！」アベルが目を輝かせて言う

「確かに、お前の素質ならば最強の槍使いにもなれるだろうな」
「そちらの目つきが悪いの、お前はなんだ・・・」

「俺は・・・世界を平和にすることだ」
今まで誰にも言っていなかったのになぜかこの時だけは言ってしまった
なぜか言わないといけないと思ってしまったのだ

「なるほど、なぜ平和じゃないといけないのだ？」
「この世界は争うことで文明を発達させてきたと言うのに」

そうこの国は争いがあるたびに技術を発達させ続けてきたのである
俺がもともといた国よりも科学技術も進んでいる。

「俺は・・・これ以上知り合いが死ぬのも悲しむのも嫌だ」
「だから俺は世界を平和にする！」

「それ面白そうだな！俺も手伝うよ！アーサー！」

しまった・・・。
アベルのことを忘れていた・・・。

「いいだろう、合格だ」
「しかし、お前たちには徹底的な力が足りていないからな」
「私が、力を貸してやろう。」

すると謎の男は指を鳴らす

急に激痛で動けなくなる

「グワァアアアアアア！！！」
声を出したのは俺ではない
周りを見るとアベルが足を押さえている・・・。
俺も目に激痛が走る
「ッ！」
目に針を何度も刺してるような気分だ
痛い、痛い、痛い・・・。

「お前らには私の目と足をかしてやった」
「あとアーサーと言ったな、お前の父は風魔法を教えてるみたいだがそれでは駄目だ」
「お前の属性は嵐だ」
「雷の魔法も修練すればお前の本当の魔法ができるだろう」

痛みで話どころではない・・・。
しかしそれが段々弱まってきた
見ればアベルのほうも叫び声が止まっていた
気絶してるらしい

「ほう、二人とも生きていたか」
「なかなかしぶといなお前らは」
「ますます興味を誘われるぞ」
「もう一つプレゼントだ」
「お前らがその能力を扱えるようになったら魔法学校にいけ」

「では・・・私を殺すために頑張ってくれたまえ」
俺も・・・もう・・・駄目だ・・・。
突然、暗幕がされたかのように俺の意識は黒い底に落とされていく

「アーサー！アベルくん！起きろ！起きるんだ！」

目を覚ますとなんどか来たことのあるアベルの部屋だった
目が痛む、目が軋む、右目が焼かれているように熱い

しかしそれよりも今まで見ていた景色が違うことに驚いてしまう
父さんの一瞬の動きもすべてコマ遅れのように見える
これが・・・あいつの言っていた能力？

「大丈夫だ、親父」

「アーサーァァァァァァァァァァ！！！！！」

「なっ！やめろぉぉぉぉぉ！抱きつくな！気色悪いんだよぉぉぉぉぉぉ！！！！」

親父と一言二言話しているとアベルが起きたらしい
アベルの父アドルフはまだ仕事をしてるらしい
薄情なやつだ・・・。
親父もこれから仕事にでないといけないらしい
親父の話では、ここらへんに魔王らしきものが目撃されたらしく国中がパニックらしい
当然、俺がなんで倒れていたかなんて言わなかった能力のことも・・・

「んじゃ！パパはアドルフと王に報告しないといけないから今日はアベルくんの家に泊めてもらいなさい」

そう言うと親父は部屋を出て行った

「アベル・・・お前、足はどうだ？」

「ってことはアーサーお前も目がおかしいんだな」

「あぁ・・・。俺はお前の動きがコマ遅れで見える」

「そうなんだ、俺はたぶん脚が早くなったんだと思う」

「動かしてなくてもわかるんだ・・・。」

「足に翼が生えたように軽い」

「とりあえず、今日は最高の誕生日だよ」

俺は皮肉気に笑ってみせる

親父が部屋を出て行ってから何時間がたっただろうか

「キャァアアアアアアア！！！」

突然、外から女性の悲鳴が聞こえてきた

外は夜中である

こんな時間に悲鳴をあげるだなんて理由はいくつかしかない

「アーサー！恐らく森の魔物が町に来たんだ！」

「だろうな・・・。今は親父が二人とも町にいないぞ！」

とりあえず二人そろって外に急いで出てみる！

驚くことはアベルのスピードである

俺はこの年ではそうとう早い部類に入るはずなのだがどんどん離される

俺が悲鳴の聞こえたところにつくとアベルがやたら体のでかい狼と戦闘していた

後ろには泣き叫ぶ女の子の姿

俺たちと同じ年ぐらいだろう

戦闘はほとんど肉眼ではとらえきれないだろう

あいつから貰った目のおかげで見れるスピードである

たぶん少女からしてみれば残像ぐらいしか見えていないであろう

俺もすぐに加勢に加わる

親父から貰った日本刀を持ってきていてよかった

だが二人のスピードに加わるのは至難の技だった

アベルの攻撃も狼に当たっているのだがなかなか皮膚が硬いのだろう

恐らく町のものたちは加勢にきてくれない

少女一人の命で魔物を追い払えるのだ、そう考えれば安いものだ

その間にもアベルが肩で呼吸をし始めた
狼と渡りあえるだけのスピードをだせてもそこはもちろん子供だ
体力面で劣ってしまうのは仕方ない
早くなにか考えないと・・・
俺はスピードで劣るぶん狼が俺に攻撃してきたときにあわせてカウンターをきめて攻撃している
そのときあいつの言葉が頭によぎる
「あとアーサーと言ったな、お前の父は風魔法を教えてるみたいだがそれでは駄目だ」
「お前の属性は嵐だ」
「雷の魔法も修練すればお前の本当の魔法ができるだろう」

いいぜ、やってやるよ・・・
この土壇場で苦手な魔法ができるかは解らない
しかしここでやらなければ二人とも殺されるし女の子も・・・
「アベル！これから賭けをする！のってくれるか！？」
「こいつ倒せるんならなんでもいいからぁあああ！！！」
俺はありったけの魔力を集める

すると親父から貰った日本刀が光る

雷が俺に落ちる、風が俺に集まってくる

まるでそれは嵐のように・・・

「アベル！全力で女の子つれて逃げろ！」

「コントロールができない！」

「マジかよ！？」

アベルが女の子を背負って逃げる

狼も俺の魔力がやばいと悟り反撃にかかる

狼の爪がカマイタチのように襲ってくる

それを楽々かわして剣を振る

それをもって狼は消滅した

ＮＥＸＴ

The first battle（後書き）

次は魔法の練習回です！
そのあとが話を進めようかサブストーリーみたいなの入れるか悩んでるんですがどっちがいいですかね？ｗｗｗ

Magic practice（前書き）

今回は修行のお話です！

Magic practicｅ

唐突だが狼を倒して得たものは3つある。

1、俺の日本刀と魔法の使い方
2、各親からの全力の拳骨(げんこつ)
3、全身の筋肉痛

ということで全身の筋肉痛がひどくて動きたくない
だがまだ俺はいいほうである・・・

アベルはもう一歩も動けんぞ！とばかりに布団に篭っている
親父は俺達の戦いぶりを使い魔でしっかりと見ていたらしく
急いで戻ってきたときにはすべてが終わっていた
とりあえずそれからいろいろあったが割愛
今日はこれから家まで戻るところである
アベルと別れるときに約束をすることにした・・・
「俺さ・・・これから修行して5年後Ａｄｏｌｆ(アドルフ)共和国の魔法学校にいこうと思ってるんだ」
アドルフ共和国とは各国の国が合同で優秀な戦士を作るために作った国である

「いいぜ！のった！俺もお前の世界を平和にする夢を手伝わせてくれ！」
そう言ってアベルは笑って答えてくれた・・・

「ありがとう・・・」

俺はなんだかんだ言ってアベルのことを本当に信頼してる

「んじゃ！5年後までに各自修行してもっと強くならないと駄目だからな！」
そう言ってアベルと別れた

家につくと久しぶりにアリシアが家に帰ってきていた

「姉ちゃん！」

「アーサー会いたかったよぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

親父が親父なら姉も姉である・・・

「あぁ！アーサー会いたかったよ！お姉ちゃんすっごい会いたかったよぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

でも姉ちゃんならぜんぜんおkである
親父はむさ苦しい！
けど姉ちゃんは良い匂いするし！むしろ俺から抱きつきたいね！

とりあえず家についてからは母さんにも怒られハグしてくれた・・・
。

俺は本気でこの家族に救われている
昔の俺は親父しかいなかったから余計に家族の暖かさに救われているのだと思う

今日は修行はやめよう・・・。
家族の絆は大事だからね！

次の日

俺は朝早くからでかけていた。

魔法の修行である
このまえの魔法からやたら魔力を操るのが簡単になっているのだ

一回自転車に乗れるとすぐに覚えてしまうのと同じ原理なのだろうか？

いまは風魔法の修行中である
今まで基礎を教わってただけあって風魔法は簡単に扱える
上級者になれば風と一緒になって姿を消せたり空を飛べたりするらしいが俺にはまだ無理だ
空を飛ぼうと思っても１ｃｍ飛ぶだけで限界だった・・・。

今の状況では風を操るのが精一杯である

雷のほうは・・・怖すぎるから駄目
もともと魔法で雷はなかなか希少なのである

だから基礎を調べることもままならない

慣れだな・・・

そういえば魔武器の日本刀はどこにいったかというと
今は俺の指にある
指にあるといっても日本刀を指にさしているわけではない
基礎魔法で武器をアクセサリーにかえているのだ
俺の場合は指輪にしている

とりあえずこの剣を本当の意味で操りたいなら
これを手に入れた迷宮に行くのが手っ取り早いだろうな・・・

よし・・・行くか！

思い立ったが吉日って言うしね！

ちょうど迷宮の場所は聞いていたし
ここから2時間ぐらいのところにある

親父のバイク借りるか・・・
翔のときにバイクはよく乗っていたからたぶん大丈夫だろう！

そう思い家に帰るとちょうど親父のバイクが家の片隅に置いてあった
サイドカーはとってあるようだ

これはちょうどいい！

「アーサー？どこかにでかけるの？」

・・・アリシアだ

「うん♪ちょっとね」

「アーサー・・・正直に言って」
「無茶する気でしょ・・・」

俺はけっこう顔にでるタイプらしい・・・

「ごめん！姉ちゃん！親父には黙ってて！」

「仕方ないわね・・・私も連れてってくれるんだったら黙っててあげる♪」

「ッ・・・わかったよ・・・」

そうしてアリシアと迷宮までバイクで行くことになった
もちろんサイドカーがないので二人乗りで

「アーサーバイク運転できるんだ・・・知らなかった／／／／」

姉よ・・・なんで顔を赤らめるのだ・・・
しかもずいぶんくっついてくるんだけど・・・
胸がぁあああ胸がぁああああああああ
プカプカプニュプニュの凶器が背中にぃぃぃいいいいいいい

など考えていると迷宮についた・・・
制限速度などないこの国ではバイクはいくらでもだせる上に目が特殊になってからは障害物などあってなきが如しだったのだ・・・

俺も親父と一緒でスピード狂だったらしい・・・・
２時間のところを２０分でついてしまった・・・・
そこから歩くこと１０分
森の中に洞窟があった

どうやらここが迷宮らしい
期待はずれにもほどがある

その思いは一瞬で間違いだと気づく
中に入った瞬間
突然世界がかわったのである

周り一面が草原？らしきものになったのだ

我が目を疑っているとアリシアが叫ぶ

「アーサー隠れて！魔物がくるわ！」

「大丈夫！」

やっぱり訓練は実践が一番だよね♪

そんな暢気なことを考えていると一匹の・・・・えっ？

そうだな・・・

例えるならあれである

でっかいカブト虫がでてきたのである・・・
アリシアはすでに半分放心状態である
そのでっかいカブト虫らしきものはそのまま突っ込んでくる
俺はすぐに日本刀を実体化させる
俺は姿勢を低くして相手の動きを見ながら足を一本切ろうとする
キンッ！
甲高い音が平原に響く
どうやらそうとうな甲羅の硬さらしい
俺は相手と距離をとるために後ろに思いっきり飛ぶ
あっぶね！
あのまま突っ立ってたらいまごろ足でつぶされていただろう
とか思っていると後ろから風を切り裂く鎌が襲う
なんとか間一髪でかわすが腕を切られた
すぐにアリシアが回復魔法をつかってくれる
「気をつけて二匹いるわ！」

相手はカマキリみたいなのとカブト虫
できれば戦いたくない・・・
が、やらなければやられるのは俺だ
「本気でいくぞ！このゲテモノ野郎ども！」
そう言って思いっきり地面を蹴る！
体が軽い、どうやらアリシアが補助魔法で身体強化してくれたらしい
カブト虫は甲羅と甲羅の継ぎ目の間接部分があきらかにほかと比べて強度が薄いのが目に見えてわかる
だからまずは姿勢を低くしてカブト虫の足の関節を狙って風を纏わせた刀で思いっきり切れ伏せる
切りながらもちゃんとカマキリの鎌をかわすのは忘れない
カブト虫は空に逃げようと甲羅で守っていた羽を広げる
「いまだ！」
俺は全力で雷の魔法で甲羅から出た羽の部分を狙う
「そこは柔らかい痛いだろ！この野郎！」
突如、カブト虫から嫌な音が聞こえる

ぶちょっ！

カブト虫は死んだ！あとはカマキリだ！

カマキリはおそらく風魔法をつかって斬撃を飛ばしているのだろうなら・・・

風が切られる瞬間に目を凝らして斬撃をかわしながらもつっこんでいく！

オラァアアアアア！！！

刀の間合いに入って切ろうとすると突然体が吹っ飛ばされた・・・

どうやらカマキリは風を体に纏っているらしい

間合いに入れないのならどうすることもできない・・・

どうする俺・・・考えろ・・・脳細胞全部フル回転させて考えるんだ・・・

そうか・・・試してみる価値はあるな

突然立ち止まった俺を見てカマキリは俺に襲い掛かろうとする

アリシアは自分のことを姉失格だと思っていた

弟が必死に戦っているのに私はなにもできない・・・

なんて駄目な姉なんだろう・・・
今にもカマキリが弟を襲おうとしているのに私は怖くて体が動かない
だけど・・・私の弟を傷つけられるのはなにがなんでも許せなかった
我に返ったときにはアリシアは弓を実体化していた

「弟を・・・いじめるなぁあああああああ！！！」

アリシアが弓でカマキリの気を引いてくれる

よし！いまだ！

雷が突然俺に落ちる！

突然雷鳴が草原一帯に響き渡る

カマキリは風を体に纏っていたなら俺も雷を纏えるのでは？
などという実はめっちゃ簡単な発想であった・・・

しかしこれはちょっとやりすぎたかもしれない

よくよく考えれば纏う場合は普通集めたりするものだ
常識人なら自分に雷を落とすなんてバカなことするわけがないので
ある
だがそれが奇知とでたのである

単刀直入に言えば俺は雷になっていたのだ

俺が動くたびにバチバチ火花が散る

それはアリシアから見ればアーサーの周りに常に花火が散ってるように綺麗だった

突如・・・
アーサーがいなくなった

気がつくとカマキリは灰になっていた

恐らくあのカマキリは政府の決めた魔物のランクのＢクラス相当だろう

普通は１０歳の子供１人が倒せるような魔物ではなかったのだ

「す・・・すごい・・・」

やはり私は姉失格だ・・・
「私・・・アーサーのこと、家族以前に男として好きになってただなんて・・・」
アリシアは小さい声でつぶやく

１人の少女が思いを決意したことなどを知る由もないアーサーが姉のところまで駆けつける

「姉ちゃん！怪我はないか！？」

「アーサーのほうが怪我は大丈夫！？」

「俺は大丈夫だよ♪やっぱり姉ちゃんは治療魔術の天才だね！」

「ありがとう」
アリシアが笑顔で答える

迷宮を進むことにした
アリシアの話ではこれ以上は魔物の心配もないらしい
草原を進んでいくと泉にたどりついた
すると水が泡だってきて仲から見知った顔が現れた
「お久しぶりですね、翔さん」クッククク
ＮＥＸＴ

Magic practice（後書き）

ここまで見てくださったかたありがとうございます。
見てくださった皆様に最高の幸せがありますように♪

A father's partner（前書き）

恐らくそろそろ矛盾が生じる可能性があるので悪しからずｗｗｗ

A father's partner

迷宮で見つけた泉そこから出てきたのはガーゴイルだった
約１０年ぶりの再会だったが忘れるわけがない・・・
「翔さん、強くなられましたね・・・」
「わたくしめは嬉しいです・・・」
「なんでお前がここにいるんだ？」
「迷宮は魔力の渦が強いのですぐに私の部屋と繋げれるのです」
「ですのでわたくしめに会いたかったら迷宮にきてくださいな・・・
」
「ねぇ？このお方は誰なの？」
アリシアは困惑しているらしい
「おやおや、わたくしめは・・・」
「あっ、こいつはガーちゃんらしいぞ」
「まぁ～ガーちゃんさんですね。よろしくお願いします♪アーサーの姉です」
にっこり笑顔のアリシア
「翔さぁあああああんんん！！！」
ガーゴイルは古傷をえぐられたようだ

「そういえば先ほどからなんでガーちゃんさんはアーサーのことを翔と呼ぶの？」

ガーゴイルはすべてをアリシアに話した

アリシアは驚いていたがショックは受けていないようだ

むしろなぜか喜んでいる

「よしっ！なら本当の兄弟ってわけではないから結婚できるのかも・・・」ボソボソッ

なにかを言ってるが気にしないことにした・・・

「アリシアさん、できればあなたも翔さんの夢の手助けをしていただきたいのですが」

「おっま！姉ちゃんに手伝わせる必要はないだろ！」

「あら？ぜんぜんいいわよ♪」

「むしろ手伝わせてもらう予定だったから」

「ッ・・・」

姉ちゃんはこう見えて結構強情だ諦めるのが無難だ

ならば絶対に姉ちゃんを危険な目にだけはさせないと心に誓った

「そういえばガーゴイル、なんか用があったからでてきたんじゃなかったのか？」

「はい、翔さんにこれを渡したくて・・・」
ガーゴイルから手渡されたのは二丁の拳銃だった
「これは雅臣のパートナーだった魔武器です」
「これをどうしても翔さんに渡したかったのです」
「その武器の能力はいたって単純」
「弾がありません」
「あと魔力を込めればいろいろな特殊な弾が撃てるらしいです」
「親父の・・・形見・・・」
「もう一つはその刀の特性ですが」
「その刀はおそらく素戔男尊(スサノオ)の所縁のある品物なのでしょう」
「スサノオは嵐の化身だったらしいですからね」
「あなたにはピッタリでしょう」
「スサノオ・・・」
「えぇ、あなたが雷になれたのはおそらくその刀のおかげでしょうね・・・」
とりあえずガーゴイルに今まであったすべてのことを話した
目のほうは俺が成長するごとに成長するらしい
ガーゴイルがあまりにもいろいろと詳しいので気になって聞いてみたところ
「わたくしめはあの部屋からでれません。ですがすべてを見通せるのです」

らしい、いわば観測者らしきものをしてると言ってた
「では最後に、あなたが修行したいと思ったらこの迷宮に来なさい。」
「あなたは実戦での成長が著しい」
「実戦をしたくなったらいつでもきてくださいね」クッククク
「あんがとよ」
それだけ言って迷宮をでることにした
迷宮からの出方は簡単だった
ただもといた世界に戻りたいと願うだけでいいらしい
迷宮をでると聞いたことのない声が聞こえた
「俺の目を覚まさせたバカはお前か！」
めっちゃ豪快な笑い声とともにそう発した
「さすがに俺も疲れたのかな・・・」
そう刀がしゃべっていたのである
「ほぉ～う、命の恩人のまえでそんなことを言うとはのぉ～」
「お前は・・・誰？」
「良くぞ聞いてくれた！私は嵐のように戦場を駆け！嵐のように生きる男！スサノオ様だ！」

「スッ・・・スサノオ！？」

NEXT

A father's partner（後書き）

この小説・・・終わりはいつ見えるんだろ・・・ｗ
ってことで段々主人公を最強にしてってるんですが・・・
敵がひどいことになっちゃいそうだな・・・ｗｗｗ
あとこんな小説に感想をありがとうございます♪
感想をもらえると作者のやる気があがりますｗｗｗ
というかアドバイスとかももらえるとすっごい助かりますんで宜しくです♪

A tempestuous man（前書き）

これで幼少期編は最後かな？
少しでもこの小説で楽しめる人がいますように♪

A tempestuous man

いま俺は新しい武器の銃のためし撃ちをしていた

ガーゴイルが弾はいらないと言ったがやっと意味がわかった

この弾は空気を銃弾にかえているらしい

だからどんどん撃っても弾切れがない

特殊弾は今の俺には一種類だけ撃てるらしい

閃光弾：強烈な光を発する

「なぁ～俺もかまってくれよぉ～」

刀がしゃべる。厳密に言えばスサノオがしゃべる。

スサノオは話してみると豪快でめんどくさいところもあるが悪いやつではなさそうだ

「お前を使ったらここ一体が焼け野原になるだろ！」

「ガッハハハ！そんぐらいの火力がこの草薙の剣の実力のわけなかろう！」

「俺が使えばこの国を焼け野原にするくらい造作もないわ！」

神様と人間を比べられても困るのだが・・・

そうこの刀はどうやら草薙の剣だったらしい

こんな危ないものを子供にもたせてもいいのか？とも思うが気には

しない。

「アーサー！お父さんがピクニックに行くから来いだってぇ～！」
後ろからアリシアの声が聞こえる

「うぃーっす！」

「おっ！我が愛しの嫁よぉぉおおおおおお！！！」
スサノオはどうやらアリシアのことがやたら気にいったらしく今では嫁と呼んでいる・・・
しかしスサノオの声は俺にしか聞こえないらしい

銃をブレスレットに変えて草薙の剣を指輪にする
指輪にしてるときはスサノオもしゃべれないらしいので内心いい気分である

家にアリシアと二人で戻ると親父と母さんが準備をしていた

家族との休息も大事だからね♪

しかし今日は家族だけではないらしい
親父の友達の子供も一緒らしい

今日が初対面だった
会ってみてまず思ったことが人形みたいだった
髪は茶髪で目の色が透き通るような青だった・・・

彼女はＦｒｉｄａ（フリーダ）というらしい
氷魔術が得意らしくこの年で村では相当強い部類の魔術師らしい

「どうも・・・フリーダと申します」

「どうも、アーサーだ」
「俺のことは気軽にご主人様とでも呼んでくれ！」

「わかったわ、このゴミ虫が」

「あれ？ものすごい暴言が聞こえた気がするけど気のせいだよね！気のせいだって言って！？」

「あら？なにか気に障ったかしらこのゴミ虫が」

俺は会って２０秒でノックアウトした・・・。

アリシアに慰められながらも目的地まで着いた

よし！俺は負けないぞ！
なんて口説こうかしら・・・

1、よっ！ゴミ虫♪
2、ねぇ？いま暇？暇ならちょっと俺と遊ばない？
3、先っぽだけでもいいから！
4、フリーダ様、あなたの騎士がお迎えにまいりました。一緒に散歩などいかがですか？キリッ

自分のコミュニケーション能力を疑うような台詞しか浮かばなかった・・・

だが試してみないで諦めるんのはいけないよな！
1はもっとひどいことになりそうだ。
3はすでになにをする気なのだろうか・・・
ということは2か4だな・・・
よし！4にしよう！
「フリーダ様、あなたの騎士がお迎えにまいりました。一緒に散歩などいかがですか？キリッ」
「あら？森にあなた好みの虫がいると思うからご一緒してきたらいかが？」
笑顔で言われた・・・
もう嫌だ・・・鬱になりそうだ・・・・
フリーダは本を読んでるらしいので俺とアリシアだけで遊ぶことにした
親父と母さんはいい年して二人でイチャイチャしていた
1時間ほどしてか。
俺達は遊び疲れて親父達のもとに戻った
親父と母さんはどうやらいまだにイチャイチャしてたらしい
フリーダはいなかった

「親父、フリーダどこに行ったの？」
「さぁ？お前達と一緒だったんじゃないのか？」
この親父・・・イチャイチャしすぎて周りをみてなかったようだ
「フリーダちゃんなら森に入ってたわよ♪」
「サンキュー母さん」
「アリシア、ちょっくらフリーダ探してくるから待っててて♪」
そう言って俺は森のなかに入ってった
森に入ってから１０分ぐらいたっただろうか。
フリーダは見つからない
もしかしたら帰ってるのかも
と思ったとき
森の奥から微かにだが戦闘音が聞こえる
「ッ！まさか！」
俺は全力で音のしたほうに走る
戦闘音は案の定フリーダとみたことのない男のものだった
「いいねぇ！可愛い女の子は高く売れるんだ！」
「ほらぁ！次いくぞ！」

そう言って男は火の玉を生み出す
フリーダは圧倒的に押されていた
まず男は相当な手練であった
しかも男は炎の魔法を得意とするのだろう
氷魔法のフリーダには相手が悪すぎる
俺は銃を実体化して閃光弾を撃つ
一瞬の出来事で男は火の玉をフリーダに向けて投げれなかった
フリーダの隣にあった木が燃える
それを風魔法で消しながらフリーダのまえまで飛ぶ
「おっさん・・・てめぇ！俺のダチば傷つけてタダで帰れると思うなよ！」
「アーサー・・・」
やっべ・・・今の俺カッコいくね？
とか思っていると
「あんたバカじゃないの！そいつ相当強いわよ！」
「私が引き付けるから早く逃げなさい！」
「フリーダ様、あなたの騎士がお迎えにまいりました。これが終わったら一緒に散歩などいかがですか？キリッ」

ちょっとこれは気障すぎたかもなぁ～と思っていると

「おいガキ！俺さまのことを倒すだとぉ？いいぜ！灰になりなぁああ！！！」

そう言うと男はなにかを呟いているようだ

突然時空が裂けたかのように業火が出現する

「グワァアアアアアアアア！！！」

火の中から異界のものが現れた

そいつは翼が生えた鬼と表現すればピッタリである

「どうしたガキ！怖くてチビリそうなのかぁ？」

正直言うとめっちゃ怖い

だって怪物と１０ｍぐらい距離があるのにここですでに熱いんだよ！？反則だからぁあああ！

「うっせえよ！こんぐらいで粋がってるおっさんが面白くて動けなかったんだよ！」

俺のバカぁあああああ！！！なにカッコつけてんだよぉぉおおおおお！！！

男はバカな生き物である

フリーダのほうに目をやるとすでに戦意喪失・・・無理もないが。

銃を一丁しまい草薙の剣を実体化

「ほぉ～フレイムデーモンか。小僧、お前はつくづく面白いな！ガッハハハ」

「あいつのことわかるのかスサノオ？」

「あいつはお前のレベルではなかなかの強敵だぞぉ～」

「んなこと見てればわかるっての！」

フレイムデーモンは指を鳴らした瞬間に風景が一瞬で変わった

簡単だ、周りが燃え尽きたのだ

一瞬で周りの木が燃えカスになったのだ・・・

「いいねぇ！燃えてきたぜ！」

「それが冗談じゃなく燃えるかもな！ガッハハハ！」

「ふっざけんな！俺には指名があるからそう簡単にくたばれないんだよぉ！」

「いいだろう！俺も力を貸そう！」

すると体が突然雷化した

「雷化は5分が限度だ！それまで勝負を決めろよ！ガッハハハ！」

「OK♪」

俺はフレイムデーモンに突っ込みながら片方の拳銃で威嚇射撃しながら近づいていく

そのまま草薙の剣で斬ろうとした瞬間フレイムデーモンは空に飛んで手を上に掲げる

するとあっという間に小さな太陽ができた
あれは止めないとやばいな・・・

一瞬であの火の玉の威力を悟り
フレイムデーモンの腕をたたっ切ろうとする

フレイムデーモンはそれを回避して肥大化する太陽をそのまま振り下ろす

その太陽を俺は全力で切り伏せようとする

やばいな・・・めっちゃ熱い

雷化しても熱い火だなんて生身のまま受けてれば一瞬で蒸発していただろう

やばい・・・押し切られるッ！

するとだんだん火の玉が凍りはじめる
フリーダかッ！
助かる！

フリーダの氷魔法がその火の玉を凍りきらせるのと同時にフレイム

デーモンの追撃がきた
それを間一髪で避ける
「おい小僧、あと3分だ・・・。」
スサノオが忠告してくれた
「わかってるよぉ！」
そう言って俺は全力でフレイムデーモンに突っ込む
ここなら剣の間合いだ
一撃で決める！
フレイムデーモンは避けようとする
だが特殊な目がフレイムデーモンの次の動きを予測する
「オラァァァァァ！」
真っ二つになったフレイムデーモンは火に包まれながら消えていく
「よし！おっさん！観念してもらおうかぁ！」
おっさんは化け物をみるような目で俺も見る
「フレイムデーモンを・・・１０歳ちょっとのガキが・・・倒した・・・だと？」
そしておっさんはそのまま倒れた

恐らくフレイムデーモンを倒されたせいで魔力が尽きたのだろう

「ではフリーダお嬢様、お散歩をご一緒にしていただけませんか？」

「いいわよ、アーサー」

フリーダはそう言ってとびっきりの笑顔を見せてくれた

親父のとこまで散歩をしながらフリーダと話していてわかったのだが

彼女もアドルフ共和国の魔法学校に入るらしい

彼女は強い魔法使いだ・・・ギルドのメンバーに欲しいな。

ちゃんと彼女の安全を守るということも伝えて勧誘をしよう・・・

「俺もアドルフ共和国の魔法学校にいくんだけど、君が欲しい。俺に君を守らせてくれないか？」

少女はいきなりの勧誘に困っているのか顔が真っ赤だ

でもなんで顔を赤くするんだろ？

「えっ・・・でも私達出会ったばっかだし／／／／」

確かに・・・

世界を平和にするだなんて考えられないよな・・・

「大丈夫だよ！俺は絶対に幸せにしてみせるから！（この世界を）」

「んっ・・・わかったわ！絶対に幸せにしましょう！（家庭を）」

「ありがとう！大好きだよ！アリシア！」（友達的な意味で）

「私もよっ！」（恋愛的な意味で）

そういえば世界を平和にすること言ったっけ？
まぁーギルドメンバーになってくれるらしいし・・・いいだろう♪
画してギルドメンバー？なのかわからないが仲間が増えたのであった

そういえば後談をここでしておこう

俺が倒した男はどうやら可愛い女の子を金持ちに売って商売してたらしい
なかなか捕まえれなくて困っていた男だったらしい

そいつを捕まえたということで謝礼の大金と二つ名を王からいただいた。

あっ・・・そういえばあの後からやたらアリシアとフリーダの仲が悪い
仲良くしてもらいたいものだ・・・

そういえば俺の二つ名を教えてなかったな
親父の二つ名の疾風と、俺の得意魔法の雷を混ぜた二つ名である
厨二病満載な二つ名だが以外に気に入ってる

俺の二つ名は・・・疾風迅雷らしい

NEXT

A tempestuous man （後書き）

とりあえずここまで書けたぁあああああ！！！

実際ここらへんは一切考えないで勢いだけで書いたからすっごい心配なんだけどねｗｗｗ

次回からこの話から5年後の１５歳からのスタートになります！

最後にこの話をここまで見てくださった物好きの皆様に感謝をよかったら続きも読んでくれると嬉しいなとか場違いなことを決していいません！はい・・・

でも・・・でも・・・ちょっとでもお時間が空いたときとかにチラッとでも見てくれると嬉しいな！いや！強制じゃないですよ！はい！

ぜんぜん見られなくても続けるもん！

自己満足で書いてるだけだもん！

・・・・・・

やっぱり見てぇえええええええ！！！

ということで感想とかアドバイス、誤字脱字など言ってくださると嬉しいです♪

では、これを見てくださった皆様に良いことありますように♪

A tempestuous new student（前書き）

とうとうアーサーも１５歳！
ここから物語がやっと進む・・・はず？

A tempestuous new student

突然だがアーサーは巨大な蛇の尻尾をかわしながらあることを思っていた

「15歳の誕生日祝いが巨大な蛇の尻尾ってのは笑えないな・・・」

そう言いつつもアーサーは風魔法で空を飛ぶ

特殊弾も3つになりその一つの業火弾で蛇の動きを封じる

周りが火の海になり焦る蛇

そこでここぞとばかりに溜めてた魔力を放出

風魔法で蛇を細切れにしてから頭をもう一つの特殊弾、炸裂弾でぶっ放す

「やっと片付いたか・・・」

そう呟きながらアーサーは目的地まで歩いていく

アーサーは15歳になり

容姿がやたら変わった

髪は赤色で短髪

身長も175まで伸び大人びてきたのである

服装は真っ黒のロングコートの中に赤色のタンクトップ

パンツはアーサーには少しでかい黒色の物を履いていた

この服は魔力を込められて作られていて耐衝撃能力があり一切汚れないというすぐれものである

「ガーゴイル、いるか？」

「クッククク。誕生日おめでとうございます、翔さま」

「ありがとよ、んで今日は別れのあいさつに来たんだ・・・」

「お前にはいろいろとこの迷宮で世話になったからな」

「そうだったんですね・・・」

ガーゴイルは顔に似合わず寂しそうな顔をする

「では・・・これをどうぞ。」

「誕生日プレゼントです」

そう言って一つの指輪を差し出す

「この指輪はエデンといいます」

「エデンは楽園をさします」

「これから平和な楽園をつくるために戦う翔さまにはちょうどいい贈り物だと思いましてね」

「そのエデンは魔力量をやたらとられますが最強の盾をだせます」

「いざというときに使ってみるのもよろしいかと」

「あんがとよ」

「んじゃ、そろそろ出かけないと明日までに着かないから行くわ！」

この国からアドルフまで距離にして９０００キロ近くあるのだ
「では・・・いってらっしゃいませ。あとアドルフにｈ・・・いやなんでもございません」
「んじゃぁーな」
そう言ってタバコに火をつけながら迷宮をでる
年齢制限のないこの世界では普通にタバコを吸っても何も注意されない
元不良の俺からしてみれば素晴らしい世界だ
そう思いながらバイクにまたがる
このバイクは親父が１２歳の誕生日に買ってくれたものだ
やたらと改造しているがすぐれものである
バイクで約１０時間ほどかっ飛ばす
「ここが・・・アドルフ共和国・・・」
アドルフ共和国は各国が合同につくる国なのでこの世界で一番発展している国である
正直言って規格外である。あまりにもでかすぎる
とりあえず観光はあとにしてこれから暮らすことになる魔法学校の寮まで行くことにした
魔法学校は街のど真ん中にあるらしいので迷うことはなさそうだ
学校の前につくとトビっきりの美人がいた・・・

いや・・・アリシアだけどね
アリシアは俺がアドルフ共和国の魔法学校に行くと言ったらある行動をはじめたのだ
そう、アリシアはアドルフ共和国魔法学校の保健教師に就任したのだ・・・
アリシアは17歳だが実力があれば先生にもなれるのだ
この世界はそうゆう世界なのだ
実力があればどんな無理も通ってしまう

「アーサーぁあああああああ!!!」
思いっきりハグされた・・・

息が苦しい・・・
胸で窒息死しそうなのだが・・・
でもこれで死ねるのは以外に嬉しいかm・・・
ガクッ

目を覚ますと豪華な個室だった
「アーサー!目を覚ましてよかったわ!」
と俺の気を失わせたアリシアが言った

どうやらここはアリシアの部屋らしい
いくつかアリシアと話してから自分の部屋まで向かう
まずは荷物を整理しよう

部屋につくと嬉しいことが起きた
約10年ぶりの再会である
「アーサー!ひさしぶり!ちゃんと強くなったかぁ?」

「アベル！めっちゃ会いたかったぞ！」

アベルは１０歳のころとは別人になっていた
髪は青い長髪をゴムで縛って身長は俺より少し高い１８０ぐらいだろうか？

まさかアベルと同室だとは思わなかったがよくよく考えるとアリシアが手を回してくれたのかもしれない

アベルと各自自分の体験談を話し自慢しあった
どうやらアベルも二つ名を持ったようだ
アベルの二つ名は幻影

理由は教えてくれなかった

なぜだろう？

「なぁ！アーサー、俺はお前がどれぐらい強くなったか知りたいから模擬戦でもしないか？」

「いいけど、どこでやるんだ？」

「ここは最強の戦士をつくる学校だぜ！？戦う場所がないわけないだろ♪」

そう言ってアベルのあとをついていくと大きなドームらしきものが見えた

ここはコロッセオというらしい
競技場らしいがいきなり使っても大丈夫なのだろうか？

受付のおっさんが気だるげに対応してくれた

「おっさん！ちょっとバトルしたいんだけど大丈夫？」

「お前ら魔法学校の生徒か？ならいいぞ」

以外にあっさり通してくれた

「あっ言い忘れてたがこのバトルは放送するから無様な姿をさらすと母国の恥さらしになるからな」

「はぁ！？」×2

そう言っておっさんはいなくなった

とりあえずやるしかなさそうだな・・・

「へっ！アーサーここ5年の特訓の成果見せてみな！」

「お前こそ、俺との差を見て泣くなよ？」

そう言って俺は銃を二丁実体化させる

アベルは槍をピアスから実体化させる。

と同時に消えた！？

単刀直入に言おう消えてなどいなかった

ただアベルは走っただけなのだ

アベルのスピードは常識の範疇を超越していた

俺の特殊な目でも遅れをとったのだ
だが俺も5年間なにもしてなかったわけではない
「ここだ！」
俺はアベルがどう動くか予測して
そこに銃弾を打ち込む
アベルは槍でそれを打ち落とす
視界に入ればこっちのものだ！片方の銃をしまい草薙の剣を実体化させる
「次はなんと戦うのだ小僧！ガッハハハ」
「スサノオ！今回のは難敵だぞ！」
そのまま突っ込みながら草薙の剣で斬りかかる
アベルは斬撃をいなしながらも槍で反撃
それを間一髪のところで後ろに飛んでかわす
「いいね！最高だぜ！アーサー！」
「こんなに楽しい戦いは始めてだ！」
「俺もだよ！」
2人が笑う

「だがそろそろ終わりだ・・・いくぜ、アーサー！死ぬなよ」

そう言うとアベルの周りから霧がでてくる

どんどん霧が濃くなっていく

恐らくこの霧は特殊な霧だろう

風魔法でも消せないはずだ・・・

と思っていると

後ろから鋭い突き

肩を刺された・・・

「・・・ッ」

痛みを堪える

この霧でアベルのスピードは反則だ

まったくアベルを捕らえきれない

「小僧、雷化しろ！」

「このままでは勝ち目はないぞ！」

「わかってるよ！」

俺の雷化は今では１０分ぐらいなら持つ

俺の体から火花が散る
この状態ならアベルのスピードについていける！
だがアベルがどこにいるかわからない常態では意味がない
なので俺は目にすべての神経を使う
微かものすら逃すな・・・
目に見えるものすべてを逃すな・・・
すると霧が一瞬動いたのが見えた
「いまだ！」
俺は超反応で体を捻る
案の定今まで俺のいたところに槍の刃があった
俺はそれを掴んでありったけの雷を通す
一瞬アベルの声が聞こえた
おそらく電流で感電してるのだろう
瞬時にアベルのアゴに掌底を叩き込む
雷化した状態の掌底だ、さすがのアベルも・・・
「ッ！？」
アベルはまだ立っていた驚きを隠せずにいたらアベルが言った

「ギブっす・・・もう体が動かん」
頭が揺らされて体が動かないらしい・・・
「さすがアベルだよ・・・あれで気を失わないなんて」
実は熱くなりすぎて殺す気で放っただなんて言えない・・・
「いや、アーサーのほうがすげぇよ！だって俺殺す気でしてたもん！」
相手も同じだったらしい・・・
するとおっさんがでてきた
「お前らのバトル最高だったよ！」
「新入生らしいがどこのギルドに入るか決めてるのか？」
そういえばギルドの説明がまだだったな
ギルドとは部活みたいなものである
依頼を受けて戦うチームのことをこの世界ではギルドという
有名になったギルドは国と契約して国の重役になれることもあるのである
大人数のものから少人数精鋭のものもある
「俺達は自分でギルドをつくる予定なんだ」
「おぉ！そうなのか！ならば是非今度あるギルドの大会にでてくれないか？」
「お前達の戦いの視聴率が凄かったんだ！」

「頼む！」
「ちゃんと優勝賞金もあるから！」
「おぉ！面白そうじゃん！アーサーでようぜ！」
体が動かせるようになったのかアベルが言う
「確かに特訓にもなるしいいな！」
「なら君達二人のタッグマッチで出場権を与えるがいいな！」
おっさんは満面の笑みである・・・
画して俺の初アドルフ共和国の一日が終わったのであった。
ＮＥＸＴ

A tempestuous new student（後書き）

次回からは学園編！

あと数人ヒロインをだす予定なんですが誰とくっつけようかなやんでいますｗｗｗ

どないしよう・・・ｏｒｚ

最後にこんなｋｓ小説を読んでくださった皆様に良いことがありますように♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6334y/

疾風迅雷の傭兵

2011年11月20日18時48分発行